



KDDI のシステムトラブルによって、多くのユーザーが大混乱を起こし、様々な被害を被った。私も携帯電話として au を利用していることから、何か緊急な連絡が入りはしないかと多少不安はあったが特別に困ることはなかった。そもそも普段から「かける」「うける」のみの利用者であることから、一週間一度も使わない日もあって、基本料金を払うのがもったいないほどだと日頃から感じているほどだ。

しかし、スマホに頼り切っている現代人にとっては、「おおごと」であったとことは容易に想像ができる。生活に不便を感じる程度ならまだしも、命に関わるようなことで連絡が取れないとなると、これは一大事である。しばらく前までは公衆電話も点在し、大いに助かったものだが、今ではほとんど見当たらない時代となってしまった。また今回の場合は、たとえ公衆電話が使えたとしても相手の携帯、スマホがトラブルの対象機種であれば、全く意味を為さないということになってしまったのである。

便利さの裏には便利さ以上の不自由さが潜んでいることを思い知らされた今回の出来事でもあった。

山登りから

一・W

山登りというところ、まず思い浮かぶ山は、伊吹山か金華山。趣味はと聞かれて「登山」と答える方が格好は良いが、それほどでもないもので、誰かに聞かれることがあると、もっぱら「山登り」で通っています。

ところで十二支という「子・丑・寅……」ですが、この十二支に因んで、その年の干支の山に登る「十二支会」というグループがあります。このグループは六〇余年前に、当時京都大学教授で霊長類学者の今西錦司先生（岐阜大学学長 1967～1973）が、5・6人の山仲間で作られました。この会の会則に「その年に同名の山があったら、標高の低い方にする。入会年齢は四十五歳……等」となっていて、当時私は四十五歳未満だったことから先輩に誘われ、十二支ひとめべりの目の最後の「亥」年、「三重県の「白猪山」に見習い会員として仲間に入れていただくことになりました。

当時は会員が二十人ほどであったと記憶しているが、二年前の「亥」年の5週目では十二支会の還暦祝いで滋賀県の「猪背山」に登った。その折には新潟や九州など全国から集まり、九十歳の大先輩も登頂され、会に一区切りがつかまりました。

初めて参加した「白猪山山行」では忘れられない思い出があります。それは下山後に松阪市の「和田金」で下山祝いのすき焼きを行っていた時のことです。今西先生が、すき焼き鍋の辛さ調節にと徳利の酒を注がれたのですが、ちよびとすきにいた仲居さんが、「勝手に酒を入れたら和田金の味でなくなる」と、先生であることなかつたとお構いなく、えらい剣幕で怒ったのでした。

私はびびりましたのですが、「和田金」は老舗だけあって「和田金」の矜持が、仲居さんにも徹底しているのだと感じました。

そのことを思い出し、おのれの身を振り返った時、米寿を間近に控える自分には、確固たる矜持があるやうに、反省する日々です。



秋季永代経

九月二十三日（金）午前十時より 午前のみ お斎はなし。 法話 住職

依然として「コロナの終息が見えてこない中ではあります。左記のような予定で執り行い思っております。詳細は今月末に決定したいと思っております。



本堂回廊をお洗濯

— 根気よく一か月近く。お盆迄には —

改修工事以来十年が過ぎました。根気に雑巾がけはしていたのですが、風雨にさらされた回廊は土埃がしみ込み、すっかり黒ずんでしまいました。なんとかもう少し白木の美しさを保ちたいものだ、あれこれ思案したのですが、防腐剤を塗ってみようかと思いついたのです。書院の縁には防腐剤を塗ってありますが、黒カビなども発生せず、意外と長くその美しさを保っていることに気づいたからです。そんなことから本堂の回廊にも塗ってみることを決意したのです。

それにしても木組みのしてある裏側まで入れると相当な総面積となり、果てしない時間がかかりそうに思えて少々弱気にもなりましたが、後期高齢者となる今年の7月の思い出にも頑張ってみようと思いつきました。



水と雑巾とブラシ一本のみ。
バケツの水はおよそ60杯。板
3枚で水は真っ黒になるので
す。暑々にも耐えました。



上部は薄茶、土
台部分は濃い茶
色を塗ります。
お盆迄には完全
仕上げ予定。

今月の掲示板

自分分からない人は
他人を責める
自分分かった人は
他人を痛む

安田理深

安田理深は真宗大谷派の僧籍を持つ仏教学者。大学教授の誘いもあったが、それを断り生涯無位無官を貫いた人物。

有名な逸話に、自宅が火災に見舞われ蔵書のすべてを失ったというが、その折、「焼かれたのではない」「焼いたのでもない」「ただ焼けた」と。そうすると事実を事実のまま受けて行けるのではないか。自も他も損なわなですむ。こんなことを今度の火事で学びましたと、語ったという。

己の罪悪深重を自覚している人は、他人の罪悪を責めることなく、むしろ相手を痛み、憐れむ心を持つというふうでしょうか。

新コーナー

十二回連載 樹林

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年立教開宗協賛テーマ
南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていつ

— 問い続ける歩みをもとに —

5回目



こころの散歩

自然法爾(しぜんほうじ)に
親鸞聖人の最晩年の言葉に「自然法爾」があります。親鸞聖人は驚異的な長命で90歳まで生きられました。お釈迦様が80歳、最澄55歳、空海61歳、法然78歳からみると、鎌倉の混乱期に90歳の長寿を全うされたのは、まさに驚きというほかありません。

親鸞聖人の最晩年に「自然法爾」という言葉が出てきますが、一切のつらわれを離れたときに現れる境地、一切の計らいを捨てて、アミダ如来に身をまかせた時に訪れる境地、浄土往生を超えて「成仏」の境地に安住されたようです。

私共にははるかに遠い世界ですが、「自然法爾」の境地が親鸞聖人の長寿を支えた根本原因ではないかと思われてなりません。35才で越後流罪を経験し、常陸では鎌倉幕府の念仏弾圧の脅威にさらされました。そんな中でも『教行信証』や和讃を残された業績の根底には阿弥陀仏への深い信仰が、究極の境地にまで高められた結果だと思われてくるのです。

光受寺御遠念法要



1つ連絡

学習会・金曜喫茶はお休みです。
9月より再開いたします。